

# 令和六年度 社会人特別選抜試験

## 小論文

### 注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
- 2 この問題冊子は、表紙を含めて6ページあります。また解答用紙2枚と下書用紙1枚が配付されています。  
試験中に問題冊子や解答用紙、下書用紙の印刷不鮮明、ページの落丁、乱丁および解答用紙の汚れ等に気づいた場合は、手を挙げて監督者に知らせてください。
- 3 解答用紙には解答欄以外に次の記入欄があるので、監督者の指示に従って、それぞれ正しく記入してください。  
(1) 受験番号欄  
(2) 氏名欄
- 4 受験番号、氏名が正しく記入されていない場合は、採点できないことがあります。
- 5 設問の字数には句読点が含まれます。
- 6 試験終了後、問題冊子、下書用紙は持ち帰ってください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ジャガイモなどの野生のイモ類が容易に見つけられたとしても、それを食べることは容易ではなかったと思われる。それというのも、ふつう野生のイモ類は塊茎(地下茎が肥大したもの)や塊根(根が肥大したもの)に多量の有毒成分を含んでいるからである。これは、野生のイモ類にとつては自らが繁殖するために動物などに食べられないようにするための工夫であるが、それを食べようとする人間にとつては問題である。有毒成分のせいで、美味しそうに見えるイモ類も加熱したくらいでは食べられないほど苦かったはずだからだ。

(中略)

ジャガイモがイギリス人の食生活に定着したとはいうものの、それは依然として「貧民の食べ物」あるいは労働者階級の食べ物でありつづけた。イギリス本来の食べ物とは、まずは何といても肉であり、それには小麦で焼いたパンがつきものだった。しかし、肉は高価であり、また小麦のパンも比較的高価であったのでジャガイモで補わなければならなかったのである。こうして一八六〇年代にはジャガイモと魚が労働者階級の食べ物を象徴する存在となった。このため、一八六一年ころのロンドンの街頭では「ホット・ポテト」を売る店が多数登場して行く。

(中略)

ヨーロッパ各国でジャガイモがまだ偏見にまみれていたなかで、唯一「ジャガイモ好き」として知られる地方があった。イギリスと海をへだてて西に位置するアイルランドである。アイルランドは日本の北海道ほどの面積しかない小国であるが、かつて「ジャガイモ好き」であったがために国民の大半が大きな災禍をこうむった歴史をもつ。ジャガイモによる「大飢饉(ザ・グレート・ハンガー)」がそれである。そして、この大飢饉は、アイルランドだけでなく、アメリカやイギリス、オーストラリアなどをも巻きこむ地球規模の大惨事となったのである。そこで、アイルランドについては後にやや詳しく述べることにしよう。

(中略)

とはいえ、ジャガイモがただちに主食の座に躍り出たわけではなかった。もともとアイルランドの大半の人たちが主食にしていたのはエンバクであり、これをオートミールとして食べていた。そして、これをバターなどの酪農食品が補っていた。とりわけ、秋にエンバクが収穫される前の夏の食べ物を中心は酪農食品であった。しかし、エンバクと酪農食品だけでは冬に食べ物が乏しくなる傾向があった。とくに、エンバクが不作になると、ときめんに食糧不足にな

った。このような状況のなかで注目されたのがジャガイモであった。実際に、一六六〇年代から七〇年にかけて、ジャガイモは数回にわたりエンバクの不作を救ったのである。

もうひとつ、アイルランドにはジャガイモを受け入れる社会的な背景もあった。まず、当時のアイルランドはイギリスの植民地のような状態におかれていた。そして、その背景にはカトリックを信仰するアイルランドとプロテスタントを信仰するイギリスの宗教的な対立があった。アイルランドのカトリック信者が所有していた農地の多くは没収され、イギリス側に配分された。こうしてイギリス人によって土地を奪われたアイルランド人は小作農になることを余儀なくされた。このような状況のなかで、主として麦を栽培していた小作農家たちは地代を支払わなければならなかったが、ジャガイモについては地代を払わなくてもよかったのである。

(中略)

実際、当時、一人のアイルランド人が一日に消費するジャガイモの量は一〇ポンド(約四五キログラム)に達していた。ジャガイモは栄養バランスに優れた作物であり、ビタミンやミネラル類にも富んでいた。そのため、あとは少しのミルクを飲むだけで栄養が十分に補えたのである。こうして、アイルランドではジャガイモ栽培がいよいよ拡大し、それにもなると人口も急増していった。すなわち、一七五四年に三二〇万人であった人口が、それから一〇〇年足らずの一八四五年には約八二〇万人にまで増加したのである。

### 「ジャガイモ大飢饉」

しかし、このあとアイルランドでは思わぬ悲劇が待ち受けていた。一八四五年八月一六日、雑誌の『園芸クロニクル』がイギリス南部のワイト島で新しい疫病が発生したと報じた。翌週には同誌の編集者で有名な植物学者のリンドレイも、ジャガイモ畑に重大な疫病が発生したと報じた。その疫病は、まず葉に斑点が広がり、やがて黒色になる。そのあと壞疽えそは莖やイモにも広がり、悪臭を発するようになる。

ただし、この時点では、この災害はアイルランド人にとって対岸の火事のようなものであった。まだ、疫病はアイルランドにまで侵入していなかったからである。が、それも束の間のこととて、疫病はイギリス全土に広がり、そのあと病原菌はアイルランドにも侵入してきた。この年の被害は比較的軽微であったが、それでもアイルランドのジャガイモの生産は半分になったと推定されている。これを当時のお金に換算するとアイルランドだけでも三五〇万ポンド、イギリスでは五〇〇万ポンドの損失となった。

このため、政府はアメリカから一〇万ポンドのトウモロコシを緊急に買い入れたが、トウモロコシはアイルランド人には不向きなものだった。トウモロコシは粉にする必要があったが、アイルランド人のほとんどは粉ひき機をもっていなかったからである。

疫病はこの年だけで終わらなかった。むしろ翌年の一八四六年の方が被害は大きかった。

(中略)

こうして、こんどはジャガイモの九割が疫病にやられた。これに厳しい冬の寒さが追いうちをかけた。一月には豪雪が襲い、人びとは草を燃やして何とか寒さに耐えた。一八四八年には再び深刻な飢饉におちいり、餓死者が続出した。「大飢饉」とよばれるゆえんである。

しかし、実際には食糧不足で餓死する人よりは、病気で死ぬ人の方が多かった。栄養不足で体力の弱った人々を様々な病気が襲ったのである。流行性の熱病も野火が広がるように全土に広がった。これを人びとは「飢餓熱」とよんだが、実際にはチフスと回帰熱であった。

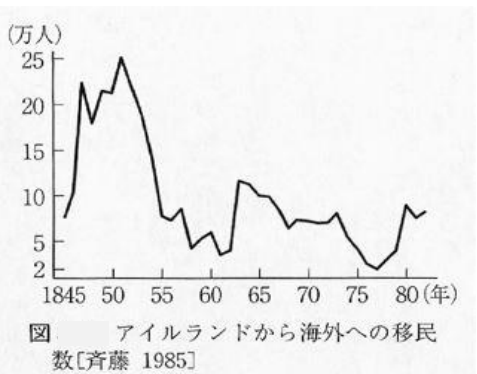
(中略)

この「熱病」のほか、はしかや赤痢、コレラなども流行した。ビタミンCを欠くとウモロコシの粉を食べていた人々は壊血病になった。この病気による死亡は一八五一年になってようやく下火になったが、それまでにこの「大飢饉」によってアイルランドで失われた人口は

一〇〇万人に達するということで歴史家の見解は一致している。あまりにも死亡者が多かったため棺桶も墓もまにあわず、そのままの状態で荷車によって運ばれ、遺体はまとめて埋葬された。

もちろん、アイルランド人も座してこの状況に耐えていたわけではなかった。疲弊したアイルランドに見切りをつけ、新天地をもとめて去っていく者があいついだ。それは、移民というより、今日の難民そのものであった。悪名高い粗末な「棺桶船」に詰めこまれ、新天地を目指したのだ。そして、このうちの五分の一は目的地に到達する前に死亡したとされている。

彼らにとっての新天地とは、英語が通じるイギリス、アメリカ、カナダ、オーストラリア、ニュージーランドなど



であった。図は、「大飢饉」以降のアイルランドからのアメリカとイギリスの植民地への移民数であり、アに移民数が激増していることがわかる。ただし、

この図にはアイルランドからイギリスへの移民は含まれていない。おそらく、アイルランドから距離的にははるかに近いイギリスへの移民は、この図に示されている数よりもずっと多かったと推測されている。

こうして、「大飢饉」のあいだにアイルランドから去っていった人たちは一五〇万人に達するとされる。しかし、貧しく、手に職もない移民たちを待ち受けていたのは苦難の道であった。

とくに、プロテスタントが大多数を占めるアメリカでは、カトリック系のアイルランド人移民は肩身がせまかった。アメリカ社会では、アイルランド人であり、カトリックでもあるということとは汚名であり、職を得ようとすれば彼らに対する偏見が立ちはだかった。実際に、一部の雇用者は、カトリック系アイルランド人を雇うことを拒否し、社員の募集広告に、わざわざ「アイルリッシュ（アイルランド人）の応募、お断り」という一文を入れた。しかし、やがてアイルランド人はこの屈辱的な文句に曲をつけ、一八七〇年代を通じて最も人気のある歌にしたのである。

(中略)

それにしても、何がアイルランドでこのような悲惨な飢饉を招いたのであろうか。まずは何といってもジャガイモの疫病の発生に原因がもとめられる。この病気のもとは、当時は知られていなかったが、真菌類のフイトフトラ・インフェスタンスであり、これに侵されたジャガイモはジャガイモ疫病になることが知られている。おそらく、アメリカ大陸からもたらされたものだと考えられている。そして、これが先述したように一八四五年六月に最初にワイト島に出現し、そこからヨーロッパ中に広がっていったのである。

では、なぜ、アイルランドだけでジャガイモ疫病が大飢饉を引きおこしたのだろうか。それは、一口にいえばアイルランド人が「ジャガイモ好き」だったからである。つまり、あまりにもジャガイモに依存しすぎたせいで、飢饉のような非常時に代替作物がなかったからである。さらに、この状態に拍車をかけたのが、単一品種ばかりを栽培したことである。ジャガイモには数多くの品種があるが、アイルランドでは一九世紀の初め頃からもっぱらランパーとよばれる品種のみを栽培するようになっていた。この品種は、栄養面では他の品種にくらべて劣っているが、少ない肥料と貧弱な土壌でも栽培ができたため、アイルランド全土に普及していたのである。しかし、ジャガイモは塊茎によって増える、いわゆるクローンであるため、単一品種の栽培は遺伝的多様性を失わせることになる。したがって、ある病気が発生すれば、それに抵抗性をもたない品種はすべての個体が同じ被害を受けることになる。アイルランドの大飢饉は、まさしくこうして生じたのであった。

ただし、大飢饉のすべての原因をジャガイモの疫病だけのせいにするわけにはゆかない。当時、アイルランドがおかれていた社会的状況も考慮にいれなければならない。先述したように、当時のアイルランドはイギリスの植民地のような状態にあり、農民は貧困にあえいでいた。そのような状況のなかで飢饉がおこったわけだが、政府は十分な対応策をとろうとしなかったのである。食糧不足を解決するためには海外から安価な穀物を早急に輸入する必要があったが、これは穀物の価格維持を目的とした法律、いわゆる穀物法のために実行が困難であった。また、自由市場における放任主義、いわゆる「レッセ・フェール」も対応のまずさに拍車をかけた。その結果、政府による穀物輸入はほとんど実施されなかった。さらに、国外への輸出に対する規制も行なわれなかったため、数多くのアイルランド人が深刻な飢餓状態にあるにもかかわら

ず、穀物はアイルランドから失われる一方、という異様な状態にあったのである。

こうして、飢餓と病気、さらに国外脱出の結果、**A**アイルランドの人口は急激に減少した。その後も人口は減少しつづけ、アイルランドの人口は一九一一年の時点で四四〇万人に激減、一八四五年時点の半分くらいにまで落ち込んだ。じつは、この後遺症はいまもつづいており、一九九〇年の時点でもアイルランドの人口は約三五〇万人にとどまっている。一方、アイルランド系の人口は、アメリカで四三〇〇万人、全世界では七〇〇〇万人に達する、といわれる。

その結果、アイルランドでは人口が減少しただけでなく、農村労働力も不足したため、耕作地にかわり、やがて放牧地が大勢を占めるようになる。実際に、私は二〇〇六年にジャガイモ飢饉の被害がひどかったアイルランド西部のコノート州を訪れたが、町をちょっと離れると人家はまばらで、畑もほとんどなく放牧地ばかりが目立っていた。そんな、まばらな人家を眺めながら、コノート州はいまだに飢饉の後遺症から立ち直っていないのではないかという印象をぬぐいきれなかったものである。

(山本紀夫、『ジャガイモのきた道——文明・飢饉・戦争』、岩波書店、二〇〇八年から抜粋、一部改変)

問1 本文中の記載において、食糧不足で餓死する人よりも病気で死ぬ人の方が多かったのはなぜか。本文中の記述を引用して30字以内で書きなさい。

問2 図を参照し、

ア
---

に20字以内で適切な期間を記入しなさい。

問3 単一品種の栽培が、この飢饉の被害を拡大させた理由は何か。本文中の記述を用いて80字以内で説明しなさい。

問4 アイルランドだけで飢餓被害が大きくなった理由として、飢饉発生後のアイルランド政府の対応の不備が指摘されている。本文を参照して、50字以内で書きなさい。

問5 傍線部**A**に関して、出題文とは原因が異なるものの、日本においても人口減少が起きている。本文を参考にして、今後、日本における人口減少が医療に与える影響を200字以内で書きなさい。

問6 問5で解答した内容に照らし合わせて、これから医療専門職を目指すあなたがこれらの問題解決のために今後どのような姿勢で大学生として学ぶのか、自分の考えを400字以内で書きなさい。

## 採点のポイント

問1 問の命題について、本文から疫病発生に伴う死亡者発生の主要原因を読み取り、指定された文字数で説明できているかを採点しています。

問2 問の命題について、本文の記述とグラフを照らし合わせ、グラフデータの特徴を読み取ることができているかを採点しています。

解答例 「大飢饉」の時代から1850年代前半 など

問3 問の命題について、ある目的に都合の良い行為や操作には別のリスクが伴い得ること、リスク管理に関する事例を読み取ることができるかを採点しています。

問4 問の命題について、本文を参照し、指定された文字数で説明できているかを採点しています。

問5 問の命題について、本文を参照し、指定された文字数で説明できているかを次の要素から採点しています。

① 次のようなキーワードを含む作文  
医療従事者数の不足・医療施設の維持困難・都市部以外の過疎化・それらの困難の長期化

② 文章力（構成、文法、語彙など）

問6 問の命題について、指定された文字数で自分の考えが書かれているかを次の観点から採点しています。

① 次のようなキーワードを含む作文

医療専門職の不足・多職種協働・チーム医療・医工連携・質的向上・介護や福祉との業務連携・少子高齢化・専門職を目指す学生としてふさわしいキーワード など

② 文章力（構成、文法、語彙など）